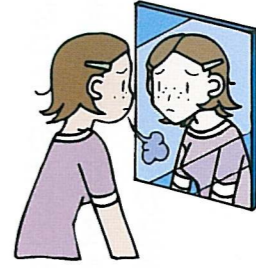


【前頁より】
 私たちは、自分で自分の顔や姿をみることはできません。「鏡」によって、はじめて自分の顔や姿を知ることができるようです。つまり、「お経」との出会いが「自分自身との出会い」といえると思います。また、私たちは「鏡」を見て化粧をしたり身づくろいをただしたりするように、「お経」は、智慧の「鏡」となって、ありのままの私の姿を写し気づかせ、正しい生き方を教えてくださるものなのです。



ともすると、私たちは他人よりも裕福で快適な生活を手にいれることが幸せであるという考え方や、人の能力に優劣をつけたり、役に立つか立たないか、というような価値観で人を見下したり差別したりするような生き方になってはいないでしょうか。

私にある、自己中心の考え方や思い上がりに気づかされ、自らの恵まれたのちを大切に、さらに他のひとのいのちを大切にしていける人生を歩みたいものです。
 合掌

知る 第9回 関東での暮らし

一連載一 親鸞聖人という生き方

★前回のあらすじ

流刑地越後(現新潟県)から関東常陸(現茨城県)へと居を移された親鸞聖人とそのご家族。以後およそ二十年に亘る関東での暮らし振りは一体どのようなものだったのでしょうか……



▲親鸞聖人のご伝記「御伝抄」絵図(一部)。様々な立場の人々が聖人の教えを求めて、稲田の草庵を訪ねる様子が描かれています。

●関東での暮らし

粗末な衣を纏い、荒れた野を歩き、貧しい農村で説法をする一人の僧。俳優三國連太郎が私財を投げ売ってまで撮った執念の映画「白い道」(1987年公開、カン又国際映画祭審査員特別賞受賞)で描かれる親鸞聖人の姿です。スクリンでは、当時の関東は未開の地として描写されています。流刑地越後より妻子と共に移り住まわれた聖人一家はさぞかし厳しい生活を強いられたことでしょうか……

と、親鸞聖人の関東時代をこのようなイメージで物語る資料が多くあります。しかし、鎌倉時代当時の関東常陸(現茨城県)は、決して貧しい土地でも野蛮な辺境でもありませんでした。

●大國常陸

それどころか常陸の国は年貢収入の最も多い大國に位置づけられている豊かな土地で、さらに聖人が結ばれた「稲田の草庵」近くにある稲田神社は、最高位の名神大社として大いに栄え、東北へと抜ける幹線道の宿場町としても賑わっていました。

また、この関東時代に聖人はご著「教行信証」草稿の完成をみえます。「教行信証」は正式には「顕浄土真実教行証文類」といい、文類という言葉が示すように夥しいお経典や論釈等の引用から成り立っています。

◆報恩講法要 平成23年度日程

報恩講(ほうおんこう)とは浄土真宗開山親鸞聖人(1173～1263)のご遺徳を偲ぶ、一年の中で最も大切なご法要です。

10月22日(土)

- 報恩講 速夜法要
14:00～【本堂】
★「大師影供作法」一本山式務部による雅楽と読経
★法話一本願寺派布教使 藤 順生 師(北海道)一

- お斎(精進料理)接待 ★先着40名様(無料)
16:30頃～【対面所】

- 報恩講 初夜法要
18:00～【本堂】
★「往生礼讃偈」一初夜偈一
★法話一本願寺派布教使 藤 順生 師(北海道)一

- 特別講演
19:00頃～
【本堂】
「日本縦断徒歩の旅
～一人で歩いた
119日～」
★講師:金澤良彦



10月23日(日)

- 報恩講 晨朝法要
7:00～【本堂】
★「正信偈」(草譜)
★法話一本願寺派布教使 藤 順生 師(北海道)一

- 報恩講 日中法要
10:00～【本堂】
★「宗祖讃仰作法」一本山式務部による雅楽と読経
★法話一本願寺派布教使 藤 順生 師(北海道)一

帰敬式



先般皆さまに帰敬式の受式についてご案内致しましたところ、8名のご門徒さまよりお申し込みを頂きまして、9月4日に帰敬式受式の本山参拝を実施致しました。受式された方々はご法名を頂かれ、仏法の味わいのある暮らしについて気持ちを新たにされたことでしょう。本当におめでとうございます。

帰敬式はご本山にて毎日執り行われておりますのでいつでも申し込むことができます。受式をご希望される方は西山別院までお問い合わせください。



▲受式された皆さま

ます。つまり「教行信証」の執筆には多くの經典類を自由に閲覧できる環境が整っていないなければなりません。たとえば稲田を所領とする豪族、宇都宮頼綱は当時の京都貴族界に出入し、法然聖人の門弟でもありました。交通の要地でもある稲田に高度な中央の文化もたらされていたと見るのは不自然ではないでしょう。鎌倉時代の常陸国は、想像以上に経済的にも文化的にも恵まれた場所だったと考えられます。(参考文献 別冊太陽「親鸞」―関東での布教―今井雅晴)

●紙

では、親鸞聖人の暮らし振りはどうだったのでしょうか。本願寺第三代寛如上人の「御伝抄」(親鸞聖人のご一代記)では次のように記されています。

「幽棲を占むといへども道俗あをたづね、蓬戸を閉づといへども貴賤ちまたにあふる」

聖人一家は慎ましく静かな暮らしを望まれたのでしようが、草庵には、聖人に教えを求め人々の出入が絶えなかった様子です。実際、聖人を慕う門弟は数百人にのぼったと言われており、そうした方々が聖人の生活を支えて行かれたのでしよう。

また、「紙」の問題があります。「教行信証」は完成本で七万五千もの漢字で成り立っていますが、その草稿といえども執筆においては相当枚数の紙を使用したと考えられます。当時、貴重品であった紙を比較的自由に手に入れたであろう聖人には、それなりの経済的余裕があったと思われまます。

*

哲学者三木清は「教行信証」を讀んで、「思索と体験とが渾然として一体をなした稀有の書である。」と評しました。それはそのまま「教行信証」をご執筆された関東時代当時の親鸞聖人の充実したご心境と重なるのではないのでしょうか。【次号へ続く】

親鸞聖人 七五〇回 大遠忌法要 記念事業

南北築地塀修復 平成24年3月 完了予定



北側築地塀に新しい瓦が葺き上がりました。南側築地塀は木部修復工事を継続中です。

★お参拝は自由です。みなさまのお越しを心待ち申し上げます。